社会学の初学者を対象とする大学の講義において教授することが良好と考えられるリファレンスモデルに関する考察

――人物・テーマ・術語を中心に――

荻　野　勝　行

1　はじめに

社会学がカバーする領域は広大であり、日夜、その領域は拡張しつつある。社会学者と称される者はそれぞれの専門領域を有している。しかしながら、全ての社会学領域に精通している人材は極めて少ないのではないかと考えられる。現在、社会学と言われる学問は社会科学の一翼を担い、多くの大学において共通教育科目や専門教育科目の入門編として、社会学や社会学概論なる名称で科目が設置されている。これらの科目においては社会学領域の全般に渡る内容が教授されることとなる。そこには当然、それらの科目を担当する教員が存在する。その担当者は学生の期待や社会の要請に沿った学習内容を教授する任を担うこととなる。これらの案件に関しては、近年ルーブリック評価等の影響もあり、関係する研究は進められている。このような状況下、社会学の初学者を対象とする大学の共通教育科目や専門教育科目の入門編の社会学という科目において、何をどの程度、教授すべきかとする係る基準についての模索を行いと考えるようになった。具体的な留意点としては、上記した科目や講義において、教授することが良好と考えられる社会学者、テーマ、社会学術語である。自分自身がこのような科目や講義を担当することとなり、30 年間がたつ。毎年、シラバスの作成や授業の内容についての検討を行う際に、適切とは言えないにしろ、何某かの基準があるのであれば、それを参考にすることができるのではないかと考える。もちろんそれぞれの大学おいては、個々の文化が存在し、一概に上記した基準を検討することは難しく、また、このような基準の設定は各々の教員の個性をスポイルする可能性もあることは承知している。このようなことも鑑み、なるべく客観性を考慮し、数値的アプローチによって、社会学の初学者を対象とする科目や講義の教授ついての基準の試作を行い、そのモデルの構築を目指したいと考える。

2　リサーチの方法

社会学の初学者を対象とする講義において、活用されるであろうとする社会学の初学者を対象とする著作をサンプルと考え、それらを分析することによって、教授されることが良好と考えられる人物、テーマ、術語の分析を行い、これらの基準について思索する。本来ならば、社会学の初学者を対象に記された全ての著作をサンプルとし、分析することが望ましいと考えられるが、その数は膨大で、また社会学という今日的な事象を扱うとする特性から、時流に沿って人文図書目録刊行会が 2020 年 6 月 1 日に発行した『社会図書目録 2020-2021 年版　単行本』(1)に記載されている社会学の初学者を対象として記されたと考えられる 31 冊をサンプルとして、それらの著作に記されている人物、テーマ、術語をデータ化し、それを基に教授することが良好ではないかとするリファレンスモデルについての考察と検討を行う。上記の書物に記載されている著作について該当しているものはほぼ網羅していると考えるが、これらの著作の中には完全なる初版第 1 刷発行のものもあれば、新版や改版あるいは再発行というものもあり、必ずしも全ての著作が新梓されたものではない。しかしながらこれらの著作は該当年度に発刊されており、そのようなことから社会的ニーズは存するものであると考える。もちろん上記したものに記載されていない社会学の初学者を対象に記された著作は存在していることは認識しているが、今回の試策においては、【表 1】の 31 冊(2)を対象とし、考察を進める。適切で明確なリファレンスモデルの策定には到底及びはしないが、ある程度のそれに近いものを提示することは可能ではないかと考え、また、社会学の初学者を対象とする科目や講義の内容や構成を考察する際の方向性の参考になるのではないかと考える。今回の検証において、それぞれの著作に関して様々な角度から分析を行ったが、本来の関心の有る案件は、先述した通り社会学の初学者を対象とする科目や講義を教授する際に良好と考えられる人物、テーマ、術語の 3 つの項目を中心に検討を行う。

【表 1】『社会図書目録 2020-2021 年版　単行本』に記載されている社会学の初学者を対象として記された著作リスト

番号	著作名等
1	秋元律郎・石川晃弘・羽田新・袖井孝子，2015,『社会学入門（新版)』有斐閣.
2	有末賢・霜野壽亮・関根政美編，2015,『社会学入門』弘文堂.
3	今田高俊・友枝敏雄，1991,『社会学の基礎』有斐閣.
4	伊藤公雄・橋本満編，1999,『はじめて出会う社会学・社会学はカルチャースタディ』有斐閣アルマ.
5	稲葉振一郎・筒井淳也・北田暁・大岸政彦，2018,『社会学はどこから来てどこへ行くのか』有斐閣.
6	宇都宮京子編，2019,『よくわかる社会学　第 2 版』ミネルヴァ書房.
7	奥井智之，2010,『社会学の歴史』東京大学出版会.

8	奥井知之，2018,『社会学［第 2 版］』東京大学出版会.
9	奥村隆編著，2020,『はじまりの社会学　問いつづけるためのレッスン』ミネルヴァ書房.
10	川田耕，2019,『生きることの社会学　人生をたどる 12 章』世界思想社.
11	工藤保則・大山小夜・笠井賢紀，2019,『基礎ゼミ　社会学』世界思想社.
12	Tomley, Sarah and Hobbs,Mitchell and Todd, Megan, and Marcus, Weeks, and DK, Yuill, Chris and Thorpe, Christopher eds,. 2015, *The Sociology Book: Big Ideas Simply Explained,* London: DK（沢田博訳，2018,『社会学大図鑑』三省堂）
13	Yuill, Chris and Thorpe, Christopher, Todd, Megan ed,. 2018, *Heads Up Sociology,* London: DK（田中新知訳，2018,『10 代からの社会学図鑑』三省堂.）
14	ケイン樹里安・上原健太郎，2020,『ふれる社会学』北樹出版.
15	塩原勉・松原治郎・大橋幸編，1993,『社会学の基礎知識』有斐閣.
16	塩原良和・竹ノ下弘久，2019,『社会学入門』弘文堂.
17	武山梅乗・呉炳三，2015,『社会学の扉をノックする　第二版』学文社.
18	筒井淳也・前田泰樹，2019,『社会学入門』有斐閣ストゥディア.
19	友枝敏雄・竹沢尚一郎・正村俊之・坂本佳鶴恵，2018,『社会学のエッセンス新版補訂版』有斐閣.
20	友枝敏雄・山田真茂留編，2020,『Do! ソシオロジー現代日本を社会学で診る　改訂版』 有斐閣アルマ.
21	友枝敏雄・浜日出夫・山田真茂留編，2018,『社会学の力　最重要概念・命題集』有斐閣.
22	中野秀一郎編　2019,『ソシオロジー事始め　新版』有斐閣.
23	西澤晃彦・渋谷望，2020,『社会学をつかむ』有斐閣.
24	西原和久・油井清光編，2018,『現代人の社会学・入門　グローバル化時代の生活世界』有斐閣.
25	長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志，2020,『新版　社会学』有斐閣.
26	本田由紀編，2019,『現代社会論　社会学で探る私たちの生き方』有斐閣ストゥディア.
27	Weber, Max, 1922, *Soziologische Grundbegriffe*（*Grundri der Sozial konomik,* III. *Abteilung, Wirtschaft und Gesellschaft,* Verlag von J. C. B. Mohr〔Paul Siebeck〕, T bingen, 1921-22, Erster Teil, Kap. I, S.1-30） 阿閉吉男・内藤莞爾訳，1987.『社会学の基礎概念』恒星厚生閣.
28	松田健，2016,『テキスト現代社会学　第 3 版』ミネルヴァ書房.
29	宮島喬編，2013,『現代社会学　改訂版』有斐閣.
30	森下伸也，2014『社会学がわかる事典』日本実業出版社.
31	盛山和夫・金明秀・佐藤哲彦・難波功士，2019『社会学入門』ミネルヴァ書房.

3　人物に関して

これらの著作の中で登場する人名数は、合計 1511 名である。次に 31 冊の著作のほぼ 1 割に当たる 3 回以上頻出の人物は 269 名となり、社会学を教授する立場の者にとって全て耳にした記憶がある人名と言えよう。それは【表 2】に示すと通りである。

【表 2】8 回以上頻出の人物

順位	人名	頻度・（掲載回数）	合計人数
1	ヴェーバー，M.	30	1
2	ゴッフマン	27	1
3	デュルケム	26	1
4	ギデンズ　パーソンズ	24	2
5	ブルデュー　マートン	23	2
6	マルクス	22	2
7	ジンメル　ミード，G. H.	21	2
8	ハーバーマス　フーコー	20	2
9	コント，A. テンニース　パーク	18	2
10	ベッカー　ベック　ルーマン　ワース	16	4
11	クーリー	15	1
12	ウォーラーステイン　スペンサー　バージェス　フロイト　ベル マンハイム	14	6
13	アンダーソン　エンゲルス　シュッツ	13	3
14	エリクソン　バーガー　マクルーハン	12	3
15	アドルノ　ガーフィンケル　スミス，アダム　バウマン　ベラー ホッブズ，T　ボードリヤール　ストロース，レヴィ	11	8
16	アルチュセール　エリアス　ベンヤミン　ホックシールド マッキーヴァー　ラザースフェルト	10	6
17	アリエス　イリイチ．上野千鶴子　サッセン　トマス，W. パットナム　フロム　見田宗介　ミルズ　リースマン	9	10
18	落合恵美子　グラムシ　鈴木栄太郎　ズナニエッキ　テイラー バトラー　パレート　ボーヴォワール　ホルクハイマー　丸山眞男 ミルズ　メイヨー　ロストウ	8	13
合計		*	69

さらにそれらの人物を絞り込み、31 冊の著作のほぼ 4 分の 1 に当たる 8 回以上の頻出の人物について考察を行う。これに該当する人物は 69 名である。この 69 名が主に活動した国家は、アメリカ 31、ドイツ 11、フランス 9、イギリス 6、日本 5、イタリア 2　イタリア 2、オーストリア 1、カナダ 1、ソビエト 1、ハンガリー 1、メキシコ 1 となる。これら 69 名のほとんどが社会学者と称せられるが、代表的にはマルクスは哲学者・経済学者・革命家、フーコーは思想史家・作家・政治活動家、・芸評論家、フロイトは心理学者・精神科医・神経病理学者、エンゲルスは経済学者・哲学者・社会主義思想家、エリクソンは発達心理学者・精神分析家、レヴィ=ストロースは人類学者・民族学者、ホッブスは政治哲学・歴史哲学・倫理学・数学・幾何学・自然哲学・社会契約伝統の近代創設者、アダム=スミスは哲学者・理学者・経済学者、ベンヤミンは

ドイツの文芸批評家・哲学者・思想家・翻訳家、アリエスは歴史家、イチイリは歴史家・社会評論家・文明批評家、テイラーは経営学者、グラムシは思想家と言うように第一義的に社会学者とは称せられない人物も多く含まれており、社会や社会学の解釈において様々な学問領域の人材が多くの著作に記載されているところも興味深い。また上述した通り、アメリカを活躍の場とした社会学者が多く見られる傾向にある。社会科学の中でも社会学は若い学問であり、同様に若い国家であるアメリカにおいて研究者が多いとすることとの関係性は関心深く、社会学が有する特性を伺うことができる。さて、上記の【表 2】から社会学の初学者を対象とする科目や講義において、この 69 名あたりの人物に関して教授することが良好かと考えら、この辺りがリファレンスモデルに近いものと言えよう。なお、ここ近年においても存命の人物は 69 名中 10 名であり、社会学という学問は、その学問的特性である時流に即するという点を見出すことができるのではないかと考えられる。

次に社会学の初学者を対象とする科目や講義において教授することが良好であると考えられる人物を日本人に絞って考察を行いたい。【表 3】は 31 冊の著作に記されている日本人だけを抜粋したものである。

【表 3】 3 回以上頻出の日本人

順位	人名	頻度・（掲載回数）	合計人数
1	上野千鶴子　見田宗介	9	2
2	落合恵美子　鈴木栄太郎　丸山眞男	8	3
3	山田昌弘　富永健一	7	2
4	有賀喜左衛門　夏目漱石　柳田国男	6	3
5	磯村英一　高田保馬　吉見俊哉	5	3
6	網野善彦　梶田孝道　北田暁大　作田啓一　竹内洋　土田健郎 鳥越晧之　内藤朝雄　中根千恵　福沢諭吉　福武直　宮台真司 吉田民人	4	13
7	浅野智彦　飯島伸子　今田高俊　大澤真幸　奥田復太郎　小此木啓吾 柄谷行人　刈谷剛彦　川島武宜　厚東洋輔　佐藤俊樹　鈴木広 橘木俊詔　筒井淳也　戸田貞三　似田貝香門　船橋晴俊　本田由紀三 浦展　森岡晴美　盛山和夫　横山源之助　米田庄太郎	3	23
合計		*	49

先に示したリファレンスモデルに該当する日本人は、上野千鶴子、見田宗介、落合恵美子、鈴木栄太郎、丸山眞男の 5 人である。日本と社会学あるいは日本人と社会学ということに焦点を当て、作成したものが【表 3】である。これに記されている多くの人物は周知の社会学者であるものの、思想史学・政治学の丸山眞男、民俗学の柳田国男、作家の夏目漱石、歴史学の網野善彦、政治思想家・教育者の福沢諭吉、精神科医・精神分析者の土居健郎や小此木啓吾、文学者・哲学者の柄谷行人、法学者の川島武宜、経済学者の橘木俊詔、ジャーナリストの横山源之助など

が 3 冊以上の著作において登場する。このようなことから社会学という学問の科目や講義において、社会学者と称せられる人物だけではなく、社会学と言われる学問を教授する際、他の領域の研究者や学際的に近い人物を取り上げることによって社会学のより良き理解が促進される傾向があることがあり、世界的な人物に関しての考察と同様であると言え、また、これら 49 人中 24 名がここ近年においても活動を継続的に行っているという点は世界レベルよりも高く、先述した通り社会学は社会の潮流に沿って考察が行われている特性が反映されている傾向を見出すことができる。

4　テーマに関して

社会学の初学者を対象とする授業・講義に関して、如何なるテーマを教授することが良好であるかについて考察を行いたい。当初、この考察を行う上において、31 冊の著作の章・節・項目をデータ化・数値化したが、そのような分析になると教授すべきテーマを検討する上において、ほぼ共通するものが出現し、対象とする著作を比較することは難しく、ここでは章立てに焦点を当てて検証を行う。章立ての分類に関しては、【表 4】の通りである。

【表 4】章の分類

順位	章・項に用いられた術語	頻出回数
1	「社会学説・社会学理論」	24
2	「家族・結婚」「政治・国家」	20
3	「地域社会・都市」「性・ジェンダー」「労働・産業・企業」	19
4	「文化」「階級・階層」	18
5	「メディア・情報」	17
6	「社会的行為・社会運動・社会集団」「教育・学校」「公共・福祉」	15
7	「グローバル化」	14
8	「宗教・科学」	12
9	「エスニシティ」「人口・環境」「コミュニケーション」	11
10	「社会心理・逸脱・排除」	8
11	「社会調査・社会調査法」	3
12	「日本文化」	2
13	その他	31

【表 4】から、社会学の初学者を対象とする著作であることから、ほぼ 3 分の 2、頻出回数 20、順位 2 の章立てに関しては、通有的に記載されているものが多く見られる。これらは授業・講義のテーマとして設定されることが良好であると考えられる。それ以下に位置する章立て

に関しては以前から継続的に設定されているものもあれば、近年、社会の潮流に従い、必要と考えられ、記載されたものもある。初版第1発行が古い著作等に関して、ジェンダー・グローバル化・エスニシティ等のカタカナで表記される文言についての記載は見られないが、このようなテーマについては今後も増加する傾向にあると言えよう。反面、かつては独立した章立てとして記載されていた農村等に関しては、大きなテーマから削除されるものもある。このようなことから順位19の日本文化に関して、今後はそのような対象となる可能性があると考えられる。その他の章立てに関して、今後、スポーツ、ボランティア、医療、観光、SDGs・サステナビリティ、ハビトゥス等が独立した章立てに設定される可能性が高く、教授する上において、それらを考慮することが良好であると考えら、独立したテーマとして掲げられることとなるのではないか言えよう。このようなことからテーマに関するリファレンスモデルについては、【表4】に示した順位2までついては、望ましく、著作の3分の1において設定されている順位14までのものに関しては、ここしばらくの間、テーマとして取り扱うことが望ましいと考えられる。しかしながら、社会学の初学者を対象とする科目や講義のベースとなるものと共に時流と社会との関係性を考察する社会学の特性を並行的に考慮することが望ましく、社会学の初学者を対象とする科目や講義におけるテーマ設定については、より対象者の理解の容易な用語を提示する姿勢が肝要ではないかと考えられる。

5　術語について

31冊の著作において、術語として取り上げられた数は、8262である。社会学の初学者を対象とする授業や講義において、この数の術語を教授することは教授する教員の立場と受講する学生の立場の双方から判断しても膨大な数と言えよう。頻出回数が5回以上の術語、つまりほぼ6分の1の著作に記されているものにおいても、その数が437である。これをさらに絞り、人物の際と同様に31冊の著作のほぼ4分の1に当たる頻出回数が8の術語に関するものが176である。それを表したものが【表5】である。

【表5】8回以上の術語等

順位	事柄名	頻度（掲載回数）	個数
1	ジェンダー	24	1
2	社会化	21	1
3	アイデンティティ　規範	19	2
3	権力　近代化　シカゴ学派　マルクス主義	18	4
4	家族　社会学　逸脱　フェミニズム　コミュニティ　ゲマインシャフト	17	6

5	文化　都市　近代社会　核家族　階級　セクシャアリティ　アノミー	16	7
6	性役割分業　世俗化　国民国家　資本主義　産業化　合理化　アーバニズム イデオロギー	15	8
7	文化資本　役割　福祉国家　社会システム　社会変動　近代家族　家父長制 ハビトゥス　ナショナリズム　コミュニケーション　エスニシティ　インターネット	14	13
8	都市化　世界システム論　人間生態学　社会構造　社会行為　機能　マスメディア グローバル化	13	9
9	大衆　地位　組織　想像の共同体　社会的事実　社会的想像力社会調査　国家 機械的連帯　移民　メディア　ゲゼルシャフト	12	12
10	民族　多文化主義　人種　新自由主義　宗教　参与観察　個人化　ホーソン実験 スティグマ　オーディエンス　エスノメソドロジー　アソシエーション	11	12
11	不平等　犯罪　男女雇用機会均等法　相互行為　差別　相互作用　新しい社会運動 少子化　社会問題　社会主義　集団　構造　結婚合法的支配　高度経済成長　合理性 機能主義　階層　マイノリティリスク	10	20
12	役割取得　有機的連帯　理念型　分業　大衆社会　秩序　疎外　生活世界　準拠集団 消費社会　終身雇用　実証主義　社会規範社会移動　社会運動　社会関係資本　支配 産業社会　自己実現　現象学的社会学　価値　環境問題　下位文化　環境　価値自由 セックス　ラベリング理論　マクドナルド化　一般化された他者　リスク社会 印象操作　ラベリング　ライフコース　フランクフルト学派　フィールドワーク SSM 調査	9	36
13	理論　理解社会学　恋愛結婚　普遍主義　非正規雇用　地域社会　伝統的支配 中範囲の理論　多国籍企業　性役割　世俗内禁欲　情報化　制度　信頼　世界都市 受益圏　社会科学　社会秩序　社会保険　重要な他者　産業革命　高齢化　公共性 国勢調査　共同体　公害　教育　業績主義　個人主義　学歴社会　格差　意味 ホワイトカラー　プロテスタンティズム　ネットワーク　フリーター パラサイトシングル　トランスジェンダー　AGIL 図式　ケア　NPO グローバリゼーション　インナーシティ　エートス　方法論的個人主義	8	45
合計		＊＊	176

先述した【表 5】で示される術語の 176 については必ずしも社会学の術語の範疇ではないと考えられるものも存するが、明らかに社会学の術語と称しても差しさわりがないものも存する。前者においても社会学の初学者を対象とする授業・講義において、その概念を明確に教授することが良好であると考えられ、そのためには社会学の術語だけに縛られはしないとする意識を見ることができる。反面、これらは特段の目新しい語彙ではなく、流動的な事象を対象とする社会学の特性を加味する上においては物足りなさを否めない。例えば、【表 5】の 1 位ジェンダーはかつてジェンダー社会学が注目されたように、この語彙が登場した際に新鮮さを覚えたものであるが、現在、この語彙は既に一般化し市民権を得たかのように使用されている。これに類するものや一般化しているものではないかと考えられる語彙も含んでいる。感覚的に初学者を対象とする授業や講義で教授することが望ましいと考えられる語彙を選抜したいとする意識が働くが今回の思索はあくまでも数量的に考察する方策を採用していることから、いささか乱暴であるが対象と

考えられる社会学の術語は、【表5】に提示した176をリファレンスモデルとする。しかしながら、前の章で述べた通り、社会の潮流によって、これらの中には退出するものもあり、また、新たなに加わってくる術語もあると考えられる。社会学という学問的特性を考えるとその頻度はかなり高い可能性を有していると考えられる。

6　おわりに

かつての大学における科目や授業・講義の内容や進め方は、担当する者の裁量の範疇が大きく、それは独立した存在であるものとしてとらえられる傾向があったと考えられる。社会学の初学者を対象とする科目や講義を教授する担当者は、これに基づき自身が関心を抱いた社会学の愉楽を伝導する役割を担うことに傾注していた。しかしながら、近年においてアドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポロシーが設定されることとなり、1つの科目や講義もそれらとの関連性の中で思考しなければならない状況にある。特に、教育目標やディプロマ・ポリシー等を達成するために必要な教育課程の編成や授業科目の内容および教育方法について基本的な考え方を示したカリキュム・ポリシーと1つの科目や講義との関連性は思考され、また、カリキュラム・ツリーにおいて、他の科目や講義との関係性は明示されることとなっている。そして、ほとんどの大学で学生による授業評価が行われおり、以前のような姿勢での授業・講義の内容や進めを模索するスタイルは是認されない状況にある。

社会学の初学者を対象とする授業や講義において、自分自身がこのような科目を担当しつつ、学生の社会学への関心の増進を図り、社会学の専門的な科目を履修するような働きかけを行なわなければならない。学生がより良く社会学を理解する上において、適正と考えられる教授法はIT機器の発達もあり、かつての教授法との差異は大きく、より担当する教員のスキルが試される状況にある。係る事項の刷新と上記した案件や教育的効果・教育生産性の向上等は教員に不安をもたらす。内包される様々な不安の中、その1つとして考えられるものは、授業や講義の内容に関するものである。具体的には教授することが良好と考えられるものとして今回人物、テーマ、術語に関して検討を行った。概ね社会学の初学者を対象とする科目や講義を教授する担当者に与えられる時間は90分が30コマで、2700分である。昨今、1回限りの試験で評価を行うとする方策は良好でないとされる傾向があり、教授に与えられる時間数は2700分よりも少ない、このような状況下で社会学の初学者を対象とする科目や講義の内容について検討する場合、ある種の指標があれば、それを参照できるのではないかと考え、今回リファレンスモデルの構築を模索した。結果的に31冊の著作を読み、データ化、数値化し、それを基にそれぞれの章においてリファレンスモデルを提示した。このような作業で、当初ほぼ今回の意図する点は成し得たのではないかと考えていたのであるが、それらをより分かり易く伝達しようとする意識を具現化することに時間を要することとなった。しかしこのような作業を通じて、教授すべき順序等の検証もでき、その傾向は身近なものから徐々に大きな存在へと移行する方向性が確認できる。特に近年

の初版発行のものは、初版発行が古いよりも更に身近なものから教授するものとなりつつあると言えよう。最後にこのような方策を試みたことと示したデータがこれからの社会学の初学者を対象とする授業や講義の内容を考察する際や社会学の初学者を対象とする著作を上梓する時の参考になれば、幸いである。

注

⑴ 人文図書目録刊行会　2020 年『社会図書目録　2020-2021 年度版　単行本』人文図書目録刊行会 2020 年 6 月 1 日

⑵ 【表 1】参照

参考文献

① 秋元律郎・石川晃弘・羽田新・袖井孝子，2015,『社会学入門（新版）』有斐閣.

② 有末賢・霜野壽亮・関根政美編，2015,『社会学入門』弘文堂.

③ 今田高俊・友枝敏雄，1991,『社会学の基礎』有斐閣.

④ 伊藤公雄・橋本満編，1999,『はじめて出会う社会学・社会学はカルチャースタディ』有斐閣アルマ.

⑤ 稲葉振一郎・筒井淳也・北田暁・大岸政彦，2018,『社会学はどこから来てどこへ行くのか』有斐閣.

⑥ 宇都宮京子編，2019,『よくわかる社会学　第 2 版』ミネルヴァ書房.

⑦ 奥井智之，2010,『社会学の歴史』東京大学出版会.

⑧ 奥井知之，2018,『社会学［第 2 版］』東京大学出版会.

⑨ 奥村隆編著，2020,『はじまりの社会学　問いつづけるためのレッスン』ミネルヴァ書房.

⑩ 川田耕，2019,『生きることの社会学　人生をたどる 12 章』世界思想社.

⑪ 工藤保則・大山小夜・笠井賢紀，2019,『基礎ゼミ　社会学』世界思想社.

⑫ Tomley, Sarah and Hobbs, Mitchell and Todd, Megan, and Marcus, Weeks, and DK, Yuill, Chris and Thorpe, Christopher eds., 2015, *The Sociology Book: Big Ideas Simply Explained,* London: DK（沢田博訳，2018,『社会学大図鑑』三省堂）

⑬ Yuill, Chris and Thorpe, Christopher, Todd, Megan ed., 2018, *Heads Up Sociology,* London: DK（田中新知訳，2018,『10 代からの社会学図鑑』三省堂.）

⑭ ケイン樹里安・上原健太郎，2020,『ふれる社会学』北樹出版.

⑮ 塩原勉・松原治郎・大橋幸編，1993,『社会学の基礎知識』有斐閣.

⑯ 塩原良和・竹ノ下弘久，2019,『社会学入門』弘文堂.

⑰ 武山梅乗・呉炳三，2015,『社会学の扉をノックする　第二版』学文社.

⑱ 人文図書目録刊行会，2020 年,『社会図書目録　2020-2021 年度版　単行本』人文図書目録刊行会.

⑲ 筒井淳也・前田泰樹，2019,『社会学入門』有斐閣ストゥディア.

⑳ 友枝敏雄・竹沢尚一郎・正村俊之・坂本佳鶴恵，2018,『社会学のエッセンス新版補訂版』有斐閣.

㉑ 友枝敏雄・山田真茂留編，2020,『Do! ソシオロジー現代日本を社会学で診る　改訂版』有斐閣アルマ.

㉒ 友枝敏雄・浜日出夫・山田真茂留編，2018,『社会学の力　最重要概念・命題集』有斐閣.

㉓ 中野秀一郎編，2019,『ソシオロジー事始め　新版』有斐閣.

㉔ 西澤晃彦・渋谷望，2020,『社会学をつかむ』有斐閣.

㉕ 西原和久・油井清光編，2018,『現代人の社会学・入門　グローバル化時代の生活世界』有斐閣.

㉖ 長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志，2020,『新版　社会学』有斐閣.

㉗ 本田由紀編，2019,『現代社会論　社会学で探る私たちの生き方』有斐閣ストゥディア.

㉘ Weber, Max, 1922, Soziologische Grundbegriffe（Grundri der Sozialökonomik, III. Abteilung,

Wirtschaft und Gesellschaft, Verlag von J. C. B. Mohr〔Paul Siebeck〕, Tübingen, 1921-22, Erster Teil, Kap. I, S.1-30）
阿閉吉男・内藤莞爾訳，1987，『社会学の基礎概念』恒星厚生閣.
㉙ 松田健，2016，『テキスト現代社会学　第3版』ミネルヴァ書房.
㉚ 宮島喬編，2013，『現代社会学　改訂版』有斐閣.
㉛ 森下伸也，2014，『社会学がわかる事典』日本実業出版社.
㉜ 盛山和夫・金明秀・佐藤哲彦・難波功士，2019，『社会学入門』ミネルヴァ書房.